

令和5年度
ふるさと秋田農林水産大賞

受賞者の業績



令和6年3月
秋田県農林水産部

目 次

1	ふるさと秋田農林水産大賞の概要	1
---	-----------------	---

2	令和5年度ふるさと秋田農林水産大賞受賞者	5
---	----------------------	---

3 受賞者の業績

【産地部門】

農林水産大臣賞・大賞	JAこまち 花卉部会（湯沢市）	11
------------	-----------------	----

【担い手部門】

～ 経営体の部 ～

大賞	農事組合法人 平沢ファーム（秋田市）	15
----	--------------------	----

～ 未来を切り拓く新規就農の部 ～

大賞	亀山 春樹（北秋田市）	19
----	-------------	----

大賞	黒澤 宏嘉・絵美子（横手市）	23
----	----------------	----

【農山漁村活性化部門】

農林水産大臣賞・大賞	特定非営利活動法人 ふじさと元気塾（藤里町）	27
------------	------------------------	----

令和5年度ふるさと秋田農林水産大賞審査委員会	委員名簿	31
------------------------	------	----

1 ふるさと秋田農林水産大賞の概要

■ふるさと秋田農林水産大賞の目的

先人が作り上げた美田や農産物、豊富な森林資源などを次の世代に受け継いでいくため、「ふるさと秋田農林水産ビジョン」の目指す姿の実現に向けて、模範となる活動を展開し、顕著な実績を上げている農林漁業者等を表彰するとともに、その取組を広く普及し、魅力ある農林水産業と農山漁村づくりを推進する。

■各部門の表彰対象

表 彰 部 門	表 彰 対 象
1 産地部門	産地の特徴を活かし、積極的な産地拡大に取り組む生産者で組織する集団
2 担い手部門	
(1) 経営体の部	農業・漁業経営で優良な実績を上げ、地域のモデルとなる個人や法人等
(2) 未来を切り拓く 新規就農の部	地域の担い手として、活躍が見込まれる新規就農者や農外からの参入者等
3 農山漁村活性化部門	6次産業化、食育、直売活動、耕作放棄地活用、グリーン・ツーリズム等、地域を活性化する活動を行っている法人、集落、集団等

2 令和5年度ふるさと秋田農林水産大賞受賞者

【産地部門】

受賞区分	名称	所在地	品目	取組概要
農林水産 大臣賞 ・ 大賞	JAこまち 花卉部会	湯沢市	トルコ ギキョウ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 当地域でのトルコギキョウ栽培は、昭和60年代に県内でいち早く始まった。平成11年にトルコギキョウ生産者を主体に部会を発足し、栽培技術の研鑽と生産拡大を進め、令和4年には過去最高の販売実績を達成した。 ○ ハウス内二重カーテン被覆とトンネル被覆を併用した越冬作型、シェード栽培や夜間電照を取り入れた抑制作型など、出荷時期に対応した栽培作型を組み合わせ、6月から11月までの長期出荷を実現しているほか、集出荷所に予冷庫を整備し、輸送中の品質保持にも取り組んでいる。 ○ 出荷最盛期前には取引市場に出向き、フェアを開催して産地の評価や消費者ニーズを聞き取るなど、生きた情報を入手することで産地のPRと発展につなげている。

【担い手部門】

～経営体の部～

受賞区分	名称	所在地	品目	取組概要
大賞	農事組合法人 平沢ファーム	秋田市	水稲 大豆 えだまめ ねぎ ダリア	<ul style="list-style-type: none"> ○ 高齢化等により管理が困難な農地が増加する中、ほ場整備を契機に、「みんなのファーム」を旗印として、平成26年に集落型農業法人を設立した。現在は、水稲や大豆を主力作目としつつ、園芸メガ団地を拠点として、えだまめ、ねぎ、ダリアの生産も拡大し、経営の複合化を実現している。 ○ 新鮮な朝採りえだまめは、JAへの出荷に加え、直売所での販売も行うなど、地元消費者のニーズに対応した販売に取り組んでいる。 ○ また、地域における雇用の受け皿として、定年退職者や地域内外の若手人材を積極的に雇用しているほか、小中学校の体験学習やインターンシップを受け入れるなど、新規就農者の確保と法人経営の安定化を図っている。

【担い手部門】

～未来を切り拓く新規就農の部～

受賞区分	名 称	所在地	品 目	取 組 概 要
大 賞	亀山 春樹	北秋田市	水稻 大豆 そば 等	<ul style="list-style-type: none"> ○ 幼少期から祖父の農作業を手伝って育ち、平成30年に就農。水稻と露地野菜による農業経営をスタートさせた。 ○ 周囲からの作業依頼も増えてきたことから、令和5年に自身が代表となる「合同会社 穉^{あき}」を設立して規模拡大や雇用環境の整備に取り組んでいる。大規模経営化に向け、GPSを活用して代かき等の機械作業を行うなど、スマート技術を積極的に導入し、省力化と高精度化を実現している。 ○ 販売面では、独自に業務用米の販路を開拓し、メーカーとの契約栽培を行っている。メーカーが指定する「つきあかり」は、北秋田市内での栽培事例がなかったため、自ら管理技術を確認して安定生産を実現し、実需者ニーズに対応している。
大 賞	黒澤 宏嘉 絵美子	横手市	トマト みつば	<ul style="list-style-type: none"> ○ 宏嘉さんは、長男の誕生を契機に“家族と一緒にいる時間を大切にしたい”との思いで東京からAターンし、「地域で学べ！農業技術研修」修了後の平成29年に、パイプハウス4棟でトマト栽培を開始した。 ○ 東京での生活と異なり、食事や休憩時は家族と過ごせる喜びを感じながら、トマト栽培に真摯に向き合い、就農1年目から地域の平均単収を上回る成果を上げた。絵美子さんも宏嘉さんの懸命に働く姿に感銘を受け、一緒に働くことを決意した。 ○ ハウスを増設し、アルバイトも雇用するなど、更なる収益向上を目指しており、令和3年には、高い単収が認められてJA秋田ふるさとトマト部会の最優秀生産者として表彰を受けるなど、新規就農者の目標になっている。

【農山漁村活性化部門】

受賞区分	名 称	所在地	取 組 概 要
農林水産 大臣賞 ・ 大 賞	特定非営利活動法人 ふじさと元気塾	藤里町	<ul style="list-style-type: none"> ○ 平成22年に、棚田やホタル生息地などの保全活動を目的として、法人を設立した。活動を通じて藤里町粕毛地域の魅力を再認識したことを契機に、地域を元気にしたいとの思いから、農泊・農村体験やイワナ養殖などの取組を始めた。 ○ 中でも農泊事業は、地元のお母さんたちの協力を得て行われており、田舎暮らしや料理を体験できる農家民宿と、空き家をリノベーションした一棟貸しの「貸し田舎 南白神ベース」は人気が高く、海外からの旅行者も訪れている。 ○ 世界自然遺産白神山地の麓で、季節に応じた様々な農村体験を堪能してもらうため、民間企業と連携し、地元小学生や県内外の大学生・留学生など、世代や地域を越えた交流活動を行っている。

3 受賞者の業績



県内トップで発展を続ける トルコギキョウ産地

J Aこまち花卉部会

秋田県湯沢市

1 産地発展の経過

●昭和60年代～

県内に先駆けて湯沢市や羽後町三輪地区でトルコギキョウ生産が始まり、平成3年にはトルコギキョウ栽培研究会を立ち上げて技術の研鑽と生産拡大を進めた。

●平成11年

J Aが広域合併したことを受け、「J Aこまち花卉部会」が誕生し、栽培技術の研鑽、出荷規格の統一による安定生産を目指した。

●平成19年

不定期に行っていたほ場巡回について、月1回部会員で巡回することとし、各部会員の生産管理状況とその後の管理について意見交換できる場を作った。

●平成30年

J Aを事業主体とする「メガ団地等大規模園芸拠点整備事業（ネットワークタイプ）」に若手農業者2名が参画し、生産拡大に拍車がかかった。

●令和2年

前年度に新たに整備されたJ A広域集出荷所の予冷库で、出荷物を2℃以下で24時間以上予冷し、植物の呼吸を抑えることで出荷輸送中の品質を保持する取組を開始した。

●令和4年

コロナ禍においても高品質のトルコギキョウを生産するための努力を続け、過去最高となる販売実績を上げた。

2 活動内容

(1) 栽培技術の研鑽

栽培期間中、月1回部会員が集まって各生産ほ場を巡回し、各々の生産管理状況の把握するとともに、その後の管理について意見交換を行っている。

また、年に1回以上は県内外の産地への視察研修を実施し、他産地と情報交換するとともに、新技術の導入について検討を行っている。



【ほ場巡回による技術向上】

(2) 取引市場を招いた出荷目揃え会

市場のニーズに対応した高い品質を確保するため、出荷目揃え会に取引市場を招き、直接部会員への情報伝達を行うなど、生きた情報を共有することにより意識統一を図っている。

また、出荷前や出荷後には部会役員が市場に出向き、出荷計画や出荷実績等について情報共有し、他産地よりも有利販売できる体制を構築している。



【取引市場を招いての出荷目揃え会】

(3) 新品種情報のいち早い入手

毎年7月に各種苗会社が開催する新品種展示会に、主に若手生産者を派遣し、品種情報をいち早く入手することで、翌年の栽培品種の選定に役立っている。



【新品種展示会での情報収集】

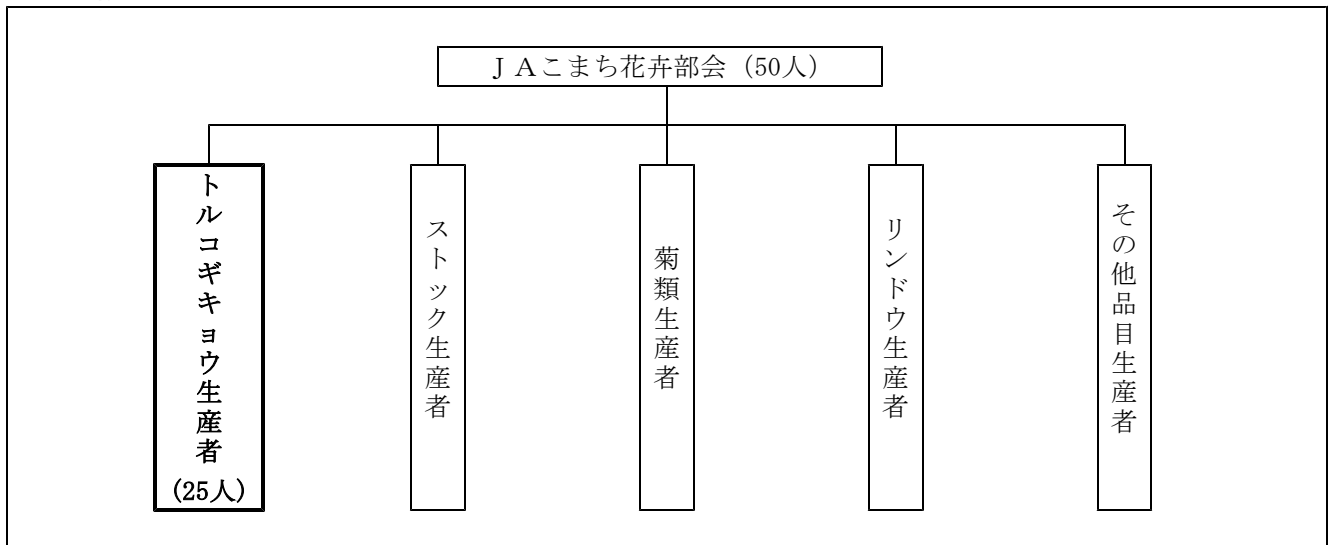
(4) 販売額等の推移

項目	単位	R元	R 2	R 3	R 4
作付農家戸数	戸	25	25	25	24
認定農業者数	人	25	25	25	24
1戸当たり面積	a	12.4	16.0	16.0	19.2
作付面積	a	310	400	400	460
10a 当たり収量	本	16,516	13,825	9,500	11,000
秀品率	%	59	47	54	43
生産量	千本	512	553	380	506
出荷量	千本	508	461	380	465
平均単価	円/本	150	164	187	207
販売額 (税抜)	千円	76,465	75,839	71,180	96,247

(5) 作目体系図

作目名	面積 規模	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	出荷量	備考
トルコギ キョウ	460 a	①越冬作型												465千本	◎：定植 ■：出荷
		②季咲き作型													
		③抑制作型													

(6) 組織図



3 消費者や実需者等ニーズに対応した取組

(1) 実需者ニーズに対応した品質保持輸送体制

令和2年度からは、JA広域集出荷所と予冷库を活用し、新たな品質保持の体制を整えた。

花きではまだ一般的ではないが、2℃以下で24時間以上冷却処理し、植物の呼吸を抑えることにより、出荷輸送中も低温を保ち、品質を保持できるようになり、これにより、咲きすぎや日持ち性の低下などのクレームがほとんどなくなっている。

また、この取組によりJAでの集荷が1日早くなったことで、出荷量や品質規格が確定した情報に基づく予約販売が可能となり、高単価での取引につながっている。



【2℃以下で24時間以上の予冷】

(2) 産地フェアの実施

出荷最盛期前には、部会員とJA担当者が、取引市場において市場担当者や仲卸、生花店を対象に「JAこまちフェア」を開催している。

フェアでは、主に対面により産地の評価や消費者ニーズを聞き取り、生きた情報を入手し、産地のPRと発展につなげている。



【市場での産地フェア】

4 技術紹介

(1) 長期安定出荷技術

県内のトルコギキョウ生産は、ほとんどが7月から10月までの出荷となっているが、市場の需要に応えるため、6月から11月までの長期出荷に取り組んでおり、それに対応した各種の栽培作型を導入している。

①越冬作型（6月～7月出荷）

ビニルハウス内に11月下旬に定植し、ハウス内二

重カーテン被覆に加え、定植畝へのトンネル被覆による三重被覆での保温と補助加温（2～3℃設定）により越冬させ、翌年の6月に開花させている。

②季咲き作型（7月～8月出荷）

3月から5月上旬にかけて定植し、出荷が一時期に集中しないよう、品種の早晚性や定植時期を考慮した栽培管理を行っている。

③抑制作型（9月～11月出荷）

6月から7月にかけて定植するが、トルコギキョウの性質上、夏季の長日高温期の栽培では未熟なまま花芽を付けてしまうことが多く、これを防ぐために、日長時間を強制的に短くして花芽分化を抑制する「シェード栽培」により、品質の確保と開花時期の調整を図っている。

また、品種差はあるものの、赤色LEDによる夜間電照を行うことで、花芽分化の抑制効果があることから、シェード栽培の省力代替技術として取り入れ始めている。



【越冬作型トンネル三重被覆】

（2）土壌性病害対策

トルコギキョウは、専用ハウスで連作されることが多いため、土壌性の病害に悩まされるケースが増えている。

特に近年は、フザリウム菌による立枯病が多く見られており、その対策としてクロルピクリン剤による土壌消毒を部会の標準技術として取り入れ、品質と生産量の維持向上を図っている。

（3）生育中の芽整理による高品質化

切り花品質を向上させるため、生育中に側枝や花芽を整理し、最終的に必要な花蕾を大きく育てる技術を取り入れている。

この技術を共有するため、特に技術の高い部会員の作業をビデオマニュアル化して、産地全体の品質底上げを図っている。



【芽整理技術のビデオマニュアル】

5 その他特記事項

（1）先進的産地としての技術等の公開

県内で最も古くからトルコギキョウ栽培が行われたことから、先進技術のモデル的産地として認知されており、県内外から技術研修の申し入れや視察等を受け入れている。

このため、他産地への視察研修なども活発で、産地間の交流がしやすい環境となっている。



【産地視察の受け入れ】

（2）園芸メガ団地への参画と地域への波及

平成30年度からネットワークタイプのメガ団地等大規模園芸拠点整備事業に参画して若手生産者の規模拡大を図り、地域の花き生産の主要品目としての認知度を更に高めた。

また、令和4年度には、東成瀬村の若手農業者が新規にトルコギキョウ生産を始めるなど、管内全域に生産の輪が広がっている。



みんなのファーム ～園芸メガ団地による地域活性化～

農事組合法人平沢ファーム

秋田県秋田市

1 経営発展の経過

●平成21年～平成24年

農業者の高齢化、担い手不足、小区画ほ場による非効率な生産、米価の下落等の問題が契機となり、ほ場整備事業を活用し、ほ場条件の改善と地域の農業経営の一本化を進めることとなった。

4集落からなる「みんなのファーム」を旗印に、5年後・10年後の地域農業を見据え、地域内の82%の農地を集積した。

●平成25年

園芸メガ団地事業を活用し、水稻と大豆だけの経営から、えだまめやねぎ、ダリアを取り入れた複合経営に方針転換した。

●平成26年～

平成26年7月に77戸の構成員からなる「農事組合法人平沢ファーム」を設立した。

平成28年には、地域内農地92haと地域外農地4haの合計96haまで経営規模が拡大した。

2 経営内容

(1) 主要作目としての水稻・大豆

現在の経営面積93.4haのうち、水稻が38.7ha、大豆が42.9haを占めており、水稻と大豆が法人経営の主要作目となっている。

水稻部門では、健苗育成を重要視した高品質米生産を実践しており、ほ場や栽培状況を地図上で見える化することで、効率的な管理作業を実践している。

大豆部門では、作業を効率化し、連作障害を避けるため3～5年程度の間隔でブロックローテーションを行い、全県平均よりも高い収量を確保している。

(2) 園芸メガ団地における複合部門

複合部門としてえだまめ、ねぎ、ダリアの生産に取り組んでおり、経営の複合化により収益確保と雇用機会の創出を図っている。

各部門には若手の従業員を部門長として配置し、技術の蓄積・継承と効率的で生産性の高い栽培管理に努めており、特にえだまめについては、地域の模範となるような高品質生産を実現している。



【各部門長を担う若手従業員】

(3) 多様な労働力の活用

複合経営を実践し、地域に還元できる収益を確保することで、地域の活性化につなげている。

特に、定年退職を迎えた人材を順次雇用し、地域での雇用機会を創出するとともに、それぞれの適性を生かすことのできる人員配置を行い、限られた労働力の有効活用を図っている。

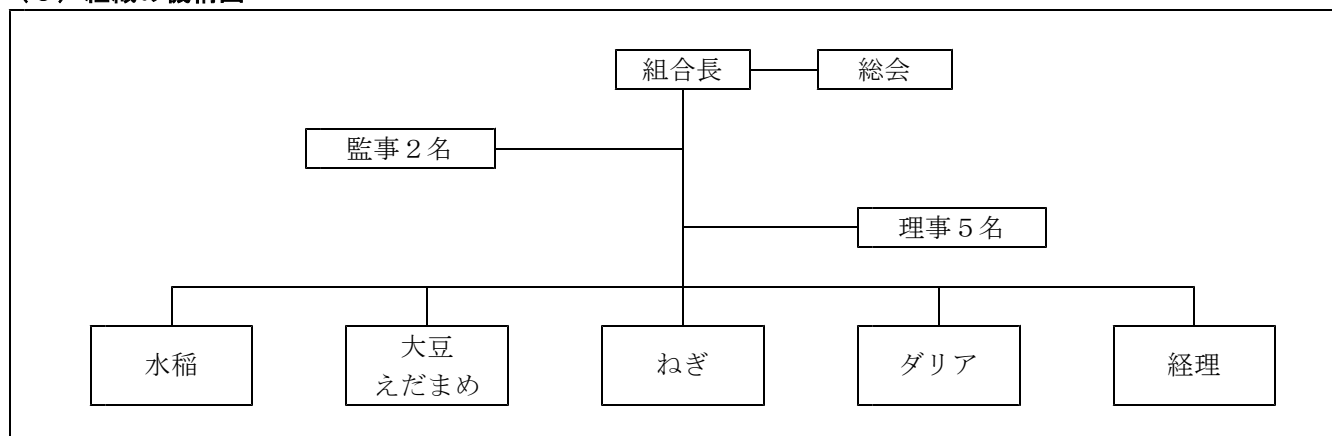
(3) 経営の現状

主な作目と規模	戦略作物				水稻		
	大豆	えだまめ	ねぎ	ダリア			
	42.9ha	8.3ha	1.9ha	1.6ha	38.7ha		
労働力の状況	構成員数	常時従事者数	常時雇用者	臨時雇用者			
	77名	10名	9名	延べ30名			
経営の現状 主な農機具及び施設	種類	台数	導入年度	規模・性能	利用した補助事業		
	パイプハウス	15	H27	94.5坪	園芸メガ団地育成事業		
	パイプハウス格納庫	2	H27	50坪、60坪	〃		
	作業場兼休憩所	1	R3	86坪	担い手確保・経営強化支援事業		
	ベストロボ	3	H27	—	園芸メガ団地育成事業		
	枝豆収穫機	1	H27	—	〃		
	枝豆脱莢機	2	H27	—	〃		
	ハイクリブーム	2	H27	—	〃		
	ねぎ収穫機	1	H27	—	〃		
	乗用畝立機	1	H30	—	農業夢プラン応援事業		
	枝豆収穫機	1	H30	—	〃		
	大豆コンバイン	1	H27	40ps	農業経営発展加速化支援事業		
	大豆コンバイン	1	R4	39ps	大豆産地生産性向上事業		
経営規模拡大の概要	作目	単位	H30	R元	R2	R3	R4
	大豆	ha	43.7	41.8	41.2	40.6	42.9
	えだまめ	ha	6.3	7.4	8.9	9.0	8.3
	ねぎ	ha	2.4	2.9	3.1	3.3	1.9
	ダリア	ha	1.8	1.8	1.8	1.6	1.6

(4) 作目体系図

作目名	面積規模	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	生産量 又は 出荷量	備考
水稻	38.7ha				○	◎				◇	◇			197 t	
大豆	42.9ha						○				◇	◇		89 t	○：播種
えだまめ	8.3ha				○		○		◇	◇				32 t	◎：定植
ねぎ	1.9ha	○		○	◎	◎			◇	◇				28 t	◇：収穫
ダリア	1.6ha				◎		◎	◇						57,600本	

(5) 組織の機構図



3 消費者や実需者等ニーズ に対応した取組

(1) 朝どり出荷

7月から9月までJA出荷しているえだまめは、新鮮なうちに消費者に届けるため、収穫した日の午前中に出荷する「朝どりえだまめ」として販売している。

(2) 自社作業場前での直売

地域住民や地域外から訪れる消費者向けとして、自社作業場の敷地内に直売所を設置しており、えだまめ、ねぎ、ダリアの販売を行っている。

えだまめは、品種名を明記し、JA出荷外となるB品をお手頃価格で販売している。ねぎについては、土ねぎの状態の販売することで、出荷調製経費を抑えた格安で販売し、いずれも秋田市内の消費者等から根強い人気がある。



【作業場敷地内に設置している直売所】



【えだまめの収穫作業】

(2) ねぎ

機械化一貫体系の導入により、栽培管理や収穫調制作業を効率的に実施している。中でも最も労働力を必要とする出荷調制作業においては、地域内の労働力を活用しており、雇用機会の創出につなげている。ねぎの収穫・出荷調制作業は、従業員の冬期間の仕事として位置づけており、周年雇用には欠かせない部門となっている。



【適切な管理が行われているねぎほ場】

(3) ダリア

施設及び露地栽培を行い、定植時期を変えることで6月から12月までの長期出荷を実現している。また、摘蕾等の管理技術も高く、球根養成ほ場を確保するなど、高品質な切り花栽培に取り組んでいる。秋田国際ダリア園が近いことから、最新の技術や情報を取り入れた栽培管理が可能となっている。



【ダリア部門を担当する佐藤珠実氏】

4 技術紹介

(1) えだまめ

極早生作型におけるマルチ＋不織布被覆技術により初期の生育量を確保し、7月下旬の早期出荷において高い収量を確保している。地域内の労働力を活用し、雑草対策等のほ場管理が徹底されており、JA秋田なまはげえだまめ部会の中でもお手本となる栽培管理を実践している。

5 その他特記事項

(1) 働きやすい労働環境

毎日作業が始まる前にミーティングを行い、現在のほ場の状況や今後の作業などについて全員で情報共有することで、法人全体の意識統一が図られている。また、従業員の交流を重視し、部門間や従業員間の連携を強化している。

令和3年度に整備した野菜出荷調製作業場に冷暖房完備の休憩室や男女別トイレを設置するなど、就業環境の改善にも取り組んでいる。

(2) 将来の地域農業に向けた取組

地域の小学校の農業体験学習や中学校の職場体験学習を積極的に受け入れているほか、地域外からの新規参入者を対象としたインターンシップの受け入れ先にも登録されており、将来の地域農業を担う後継者確保に向けた啓発活動を実践している。



水稲をメインとした 若手法人経営者の挑戦!!

亀山 春樹

秋田県北秋田市

1 経営発展の経過

●平成9年

北秋田市生まれ。幼少期から祖父の農作業を手伝うなど農業に触れあってきた。

●平成26年～

祖父母の農作業を本格的に手伝いながら農業の魅力に触れることで、就農への意識が高まってきた。

●平成30年

水稲7haとやまのいも20aなどの野菜を組み合わせ、農業経営をスタートした。

地域の若手農業者グループである北秋田地区農業近代化ゼミナールやJA秋田たかのす青年部へ参加した。

農業近代化ゼミナールにおいては「株稲栽培に取り組んで」と題したプロジェクト活動を実施し、ウィンターフォーラムにて成果発表を行った。

●令和2年～

自身の農業経営が軌道に乗るに連れ、周囲からの作業依頼が殺到し、年々水稲や畑作の作付面積が拡大していった。

●令和5年

経営規模の拡大に伴い、雇用環境を整える必要を感じ、自身が代表となる農業法人「合同会社 穂」を設立した。「穂」には植物が実るという意味もあり、自分の名字である「亀」も含まれることから引用した。

北秋田地区農業近代化ゼミナールの会長に就任し、地域の若手農業者の手本となる営農を展開している。



【法人化に向けた専門家との打合せ】

2 経営内容

(1) 「合同会社 穂」の設立

経営理念として「優れた技術、情報を積極的に取り入れ生産性と持続性の向上に努める」「地域の環境保全と産業の発展に貢献できる会社を目指す」を掲げ、農作業の受託や農地の借り受けなど、地域農業の担い手として活躍している。

構成員は自身と兄の2名であり、昇給制度を導入するなど、法人としての体制整備を進めている。

(2) 水稲をメインとした経営

水稲が経営の中心であり、地元JAのみならず関東圏の企業と栽培契約を結ぶなど、所得向上に向けた取組を行っているほか、畑作物として大豆やそば、やまのいも等の作付けを行っている。

(3) 経営の現状

経営の現状	主な作目と規模	戦略作物				水稻
		大豆	そば	やまのいも		
	1.2ha	1.7ha	0.2ha		14.8ha	
労働力の状況	構成員数	常時従事者数	常時雇用者	臨時雇用者		
	2名	2名	—	—		
経営の現状	主な農機具及び施設	種類	台数	導入年度	規模・性能	利用した補助事業等
		トラクター	3	H29	45ps	青年等就農資金
		田植機	1	R 4	8条	青年等就農資金
		乾燥機	2	R 2	28石	青年等就農資金
		コンバイン	1	H28	48ps	
		軽トラック	1	R元	4WD	
経営規模拡大の概要	作目	単位	R 2	R 3	R 4	
	水稻	ha	12.5	14.1	14.8	
	大豆	ha	1.5	1.5	1.2	
	そば	ha	—	1.0	1.7	
	やまのいも	ha	0.2	0.2	0.2	

(4) 作目体系図

作目名	面積規模	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	生産量 又は 出荷量	備考
水稻	14.8ha				○	◎				◇	—	◇		69 t	
大豆	1.2ha					○	—	○			◇			607kg	○：播種 ◎：定植 ◇：収穫
そば	1.7ha							○				◇		450kg	
やまのいも	0.2ha					◎	—	◎				◇		777kg	

3 消費者や実需者等ニーズ に対応した取組

(1) 水稻の販路拡大に向けた契約栽培の実践

主食用米を地元JAに出荷する一方で、業務用米については独自の販路を開拓し、卸会社との栽培契約を締結するなど、安定収入を得ている。

品種は、取引先から指定された「つきあかり」で、北秋田市内での栽培事例がなかったことから、自ら試行錯誤の上管理技術を確立することにより安定生産を実現している。



【指定品種「つきあかり」のほ場】



【GPSアシストと連動した代かき作業】

(2) 畑作物（そば、大豆）

水稻との輪作作物として、そばや大豆の栽培に取り組んでおり、大豆の畝立て狭畝栽培や、そばの裏作における緑肥の導入など、増収に向けた技術を積極的に取り入れている。



【そばとヘアーリーベッチの導入検証】

4 技術紹介

(1) 水稻

高齢化が進む中、地域の若い担い手として期待されており、水稻の受託面積が年々拡大している。

水稻の大規模経営化に向けては、育苗箱施肥技術を実践し、GPSを活用して代かき等の機械作業を行うなど、スマート技術を積極的に導入しており、省力化と高精度化を実現している。

また、栽培技術も高く、令和3年度の種苗交換会では、初出品ながら3等賞を獲得している。

(3) 露地野菜（やまのいもなど）

家族の経営を継承し、就農当初からやまのいもの栽培に取り組み、令和4年度の単収は、JA秋田たかのすやまのいも部会で2位の好成績を収めた。

5 その他特記事項

(1) 地域貢献活動への参画

地元の J A 秋田たかのす青年部に所属し、伝統行事に積極的に参加するなど、自身の経営のみならず、地域の農村振興にも大きく貢献している。

毎冬その年の豊作を祈願して開催される作況占いでは、「雪中田植え」と「雪中稲刈り」の大役を担い、地域の P R にもつながっている。

(2) 北秋田地区農業近代化ゼミナール会長に就任

令和 5 年度から北秋田地区農業近代化ゼミナールの会長に就任した。各種イベントへの参加や研修会の開催など、若手農業者のリーダーとして活躍している。



家族への思いと トマト栽培にかける人生

黒澤 宏嘉
絵美子

秋田県横手市

1 経営発展の経過

●平成26年

平成18年に上京していた宏嘉氏は、長男の誕生を契機に“家族と一緒にいる時間を大切にしたい”との思いで帰郷を決意し、農業で家族を支えることを目指す。

●平成27～28年

宏嘉氏が横手市実験農場の「地域で学べ！農業技術研修」を受講。

●平成29年

宏嘉氏が就農。パイプハウス4棟（10a）でトマト栽培を開始し、冬期にはみつばを生産。就農1年目から地域の平均単収を上回る成果を上げた。

●平成30年

絵美子氏は、東京での生活と異なり、食事や休憩時には家にいる宏嘉氏を見て安心するとともに、宏嘉氏のトマト栽培にかける姿に刺激を受け、自らも就農を決意。

●令和2年

トマトハウス3棟を増棟。作付面積を拡大して雇用を確保しつつ、家族一丸となって更なる経営強化を図る。

2 経営内容

(1) トマト

実験農場でのシミュレーションを生かした作業循環で、パイプハウス7棟（17a）をフル回転させて、経営のメインとなるトマトを栽培している。

高い栽培技術と雇用労務管理により、令和3年には、20.6 t / 10 a と過去最高の収量となり、その後も経営指標を上回る安定した収穫量を確保している。



【トマトハウス遠景】

(単位：t / 10 a、%)

	H29	H30	R元	R 2	R 3	R 4
出荷量 ①	8.5	11.3	12.4	14.3	20.6	15.3
J A部会平均 ②	7.2	6.9	7.7	7.8	8.5	7.9
① / ②	118	164	161	183	242	194

【トマトの単収の推移】

(2) みつば

冬期の野菜品目として10aでみつばを栽培し、関東の卸売業者との直接取引を行っている。

(3) 経営の現状

経営の現状	主な作目と規模	戦略作物					水稻
		トマト	みつば				
		17 a	10 a				—
	労働力の状況	構成員数	常時従事者数	常時雇用者	臨時雇用者		
		2名	—	3名	—		
	主な農機具及び施設	種類	台数	導入年度	利用した補助事業		
自動点滴灌水装置		1	H29	新規就農経営開始支援事業			
育苗設備一式		1	H29	新規就農経営開始支援事業			
ハウス電気設備		1	H29	新規就農経営開始支援事業			
ラジコン動噴		1	H29	新規就農経営開始支援事業			
自動点滴灌水装置		1	R 2	新時代を勝ち抜く！農業夢プラン応援事業			
経営規模拡大の概要	作目	単位	H29	H30	R元	R 2	R 3
	トマト	a	10	10	10	17	17
	みつば	a	10	10	10	10	10

(4) 作目体系図

作目名	面積規模	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	生産量 又は 出荷量	備考
		トマト	17 a				○	◎		◇	—	◇			
みつば	10 a							◎					◇	277kg	

3 消費者や実需者等ニーズに対応した取組

(1) トマト

単位面積当たり収穫量の増大を目標に掲げ、栽培講習会に必ず出席するなど、技術の研鑽を怠らず、気象の変化に柔軟に対応しながら真摯にトマトと向き合っている。

また、共選の出荷基準に合った出荷を徹底しているほか、気温の違いによってトマトの収穫時期を変えるなど、トマト部会員として誇りを持って生産に取り組んでいる。

令和2年のハウス増棟に伴い雇用を拡大した際には、従事者に1週間付き添ってトマトの選別・収穫方法を教えるなど、技術指導を徹底し、人材の育成と良品の出荷に努めている。



【確かな技術で優れたトマトを生産】

(2) みつば

トマト収穫後の冬期品目として、正月用の切みつば軟化栽培を実施している。夏季に株の養成を行い、堀り上げやハウス内への伏せ込みを経て12月に収穫し、卸売業者へ直接出荷している。



【正月用のみつば栽培】

(2) 適切な地温確保

園芸作物は、いかに根を伸張させるかが重要であり、トマトの場合、地上部と地下部の生育適温は異なるため、春先は株回りにグリーンマルチを用いて地温の確保に努め、梅雨明け後は通路に白黒ダブルマルチを用いて地温の上昇を防ぐなど、多収に向けた土台づくりを行っている。



【地温上昇を防ぐ取組】

4 技術紹介

(1) ほ場の排水改善

多くの園芸ほ場において、ロータリー耕の下層に耕盤が形成されて浅根となることを踏まえ、急な強雨でも倒伏しないよう、ほ場回りには深さ50cm以上の明渠を施工したほか、ハウス脇にも30cmの補助明渠を施工し、排水路とつなげることで排水改善を図っている。



【ほ場回りの深い明渠】

(3) 夏場の樹勢確保

トマト栽培では、梅雨明け後の8月上旬は樹勢が落ちやすいことに加え、果実の肥大期が高温期と重なり、その後は小玉になりやすい。

このため、樹勢低下が長期間に及ばないように、7月下旬からわき芽を伸張させて十分な葉面積を確保し、8月中下旬以降も、より多く収穫できるように樹勢維持を図っている。



【収穫量を支える健全な葉】

5 その他特記事項

(1) 経営分析

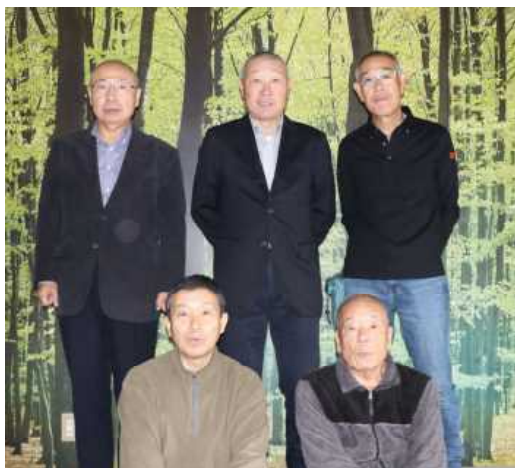
就農開始時は、選外出荷品をスーパー等へ納品していたが、調製作業に手間取り、時間当たり収益性が悪いことを分析する。共選出荷に絞り生産に集中する方針に切り替えた結果、令和3年に部会最高単収の20.6 t / 10 a を確保し、J A秋田ふるさとトマト部会の最優秀生産者表彰を受賞した。

(2) 地域への貢献

現在は常時3名を雇用し、地域経済の活性化に努めている。前職で苦勞した経験を踏まえ、労働者に寄り添った経営理念に基づき、労働環境の整備や丁寧な技術伝達に努めており、結果的に品質の良いトマトの生産につながっている。



【夫婦そろっての整枝作業】



「南白神の里」に 多くの人を呼び込もう!

ふじさと
元気塾

特定非営利活動法人
ふじさと元気塾

秋田県山本郡藤里町

1 経営発展の経過

●平成22年

世界自然遺産「白神山地」の麓、自然の恵みに溢れるふる里で、荒廃が進む貴重な棚田や失われつつあるホタル生息地等の環境保全活動に取り組む中、地域から元気が失われていることに危機感を感じ、同じ思いを持っている仲間と「特定非営利活動法人ふじさと元気塾」を設立した。

●平成24年

現理事長が前職である教員時代に神奈川県藤沢市で暮らしていた縁で、藤沢市との交流事業を民間企業の助成を活用して実施した。

●平成29年

農林水産省の農泊推進事業を活用し、藤里町粕毛地域の6軒の農家と農家民宿を立ち上げ。農泊と併せて、四季折々の藤里町の自然を堪能できるようなサイクリング等の農村体験メニューの提供を始めた。

サクラマスの養殖を受託し、そのノウハウを活用して白神山地の湧水で育てたイワナの養殖も開始した。

●令和2年

県の補助事業を活用し、地域の小学生を対象として農家民宿1泊2日の農村体験学習を実施した。

●令和3年

県や町、民間企業の支援を受け、粕毛地域にある空き家を活用した一棟貸し「貸し田舎 南白神ベース」をオープンした。

2 活動内容

(1) 地域における組織の役割

平成22年10月1日にNPO法人を立ち上げ、地域の活性化を図るための活動を開始。

関係自治会や地域の環境保全組織等で構成する「ふじさと粕毛地域活性化協議会」、「ふじさと粕毛まちづくり協議会」の事務局を担うほか、農村RMOの形成にも主体的に参画するなど、地域全体で行っている活動の中心的な役割を担っている。

(2) 活動の概要

国や地方自治体、民間企業の補助金等を活用し、都市農村交流や高齢化集落支援のほか、農泊事業や移住定住事業など交流人口の増加を目指す取組に加え、イワナ等の養殖管理や木材加工等の地域資源の活用に向けた事業を行っている。

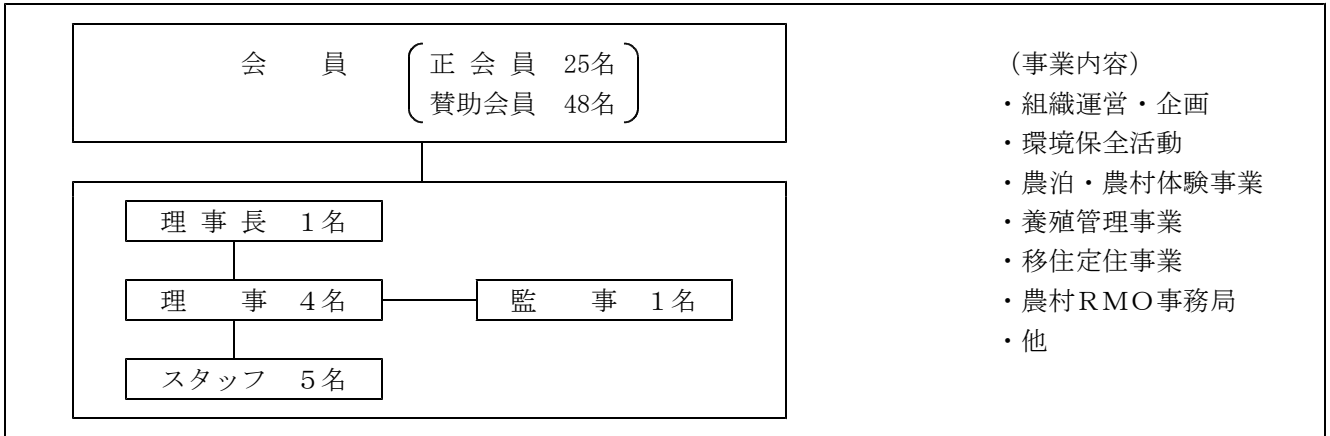
特に、農泊事業については、集落の農家が経営する農家民宿の事務局として、国内外から宿泊者を受け入れ、地域ならではの地元産食材を生かした食育や農村生活体験、南白神の自然を体験するグリーンツーリズム活動も積極的に行っている。

(単位：人)

年度	H30	R元	R2	R3	R4	R5
延べ宿泊利用者数	176	300	280	330	610	400

【農泊利用者数の推移】

(4) 組織体系図



3 地域の特産を生かした取組

(1) 農泊事業「粕毛はなの民泊通り」

平成29年に、粕毛地域の農家6軒と協力し、農家民宿を開始（現在は4軒）。これらが立ち並ぶ通りを「粕毛はなの民泊通り」と名付け、ふじさと元気塾が施設の予約や宿泊調整を行っている。



【「粕毛はなの民泊通り」マップ】

令和3年に、空き家をリノベーションした「貸し田舎 南白神ベース」をオープン。長期滞在も可能な施設で、特に県外からの利用者が多くなっている。



【一棟貸し「南白神ベース」】

令和元年からは、海外からの宿泊客も受け入れており、途中、新型コロナの影響はあったものの、令和5年度は、南アフリカからの4名をはじめ、海外から25名が来訪した。今後のインバウンド需要の拡大により、交流人口の増加も期待できる。



【海外からの宿泊客の受け入れ】

(2) 農村体験活動

訪問客には、農泊とともに白神山地の自然を十分に堪能できるサイクリングや登山等の農村体験メニューを提供しているほか、地元小学生の授業の一環として、農泊や農村体験学習を受け入れている。

県内外の学生のほかJALや東北電力等の民間企業と連携を図り、地域活性化について幅広く意見交換を行い、世代や地域を越えた交流を深めている。



【農家民宿で大学生と地元小学生との夕食づくり】

(3) サクラマス、イワナのブランド化

白神山地の湧き水を活用して、サクラマスやイワナの養殖を行っている。

サクラマスは、米代水系サクラマス協議会から委託を受け、放流するための稚魚養殖を行っている。

イワナは、ふじさと元気塾が養殖し、町内の宿泊施設や農家民宿、農村体験に提供しており、将来は「白神イワナ」としてのブランド化も目指している。



【「白神イワナ」の炭火焼き】

5 その他特記事項

(1) 農村RMOの取組

関係自治会や地域の環境保全組織、福祉協議会、地域おこし協力隊等で構成する「ふじさと粕毛地域活性化協議会」が、令和5年度に採択された農林水産省の「農村型地域運営組織（農村RMO）形成推進事業」を活用し、農用地保全や地域資源活用、生活支援の計画策定と実証を行うモデル事業を実施している。

ふじさと元気塾は、協議会事務局として、これまで培ってきた地域活性化のノウハウを生かしながら、農村RMOの中心的な役割を担っており、地域の元気を盛り上げていくこととしている。

4 地域農業、地域社会に及ぼした影響

(1) 粕毛地域の活性化

地元にとっては当たり前となっている農村の暮らしや食事が、都会に住む人々にとっては魅力にあふれたものであるという気付きの下、農泊事業に協力する「お母さん方」にあまり負担とならないようにしながら、農家民宿を訪れる訪問客に地域全体が一体となって、ありのままの「日常」を提供している。

農村体験での指導等を通じて、地域住民の生きがいや元気が生まれている。このため、集落の話し合いの場へも多くの住民が積極的に参加し、より良い活動にしようと活発な意見交換が行われている。

令和5年度ふるさと秋田農林水産大賞審査委員会
委員名簿

区 分	所 属	職 名	氏 名	備 考
審査委員長	秋田県農林水産部	部 長	齋 藤 正 和	県
審 査 委 員	秋田県立大学生物資源科学部	教 授	岡 田 直 樹	学識経験者
〃	秋田県農業協同組合中央会	営農農政部長	芥 藤 恭 史	農業関係団体
〃	秋田県土地改良事業団体連合会	専務理事	佐 藤 暢 芳	農業関係団体
〃	秋田県農林水産部農林政策課	課 長	佐 藤 大 祐	県

令和6年3月 発行

**令和5年度ふるさと秋田農林水産大賞
受賞者の業績**

編集・発行 秋田県 農林水産部 農林政策課
〒010-8570 秋田市山王四丁目1番1号
(秋田県庁本庁舎4階)
TEL 018-860-1723
FAX 018-860-3842